

早く日本に連れ帰りた

戦没者の遺骨が
海底に多数散乱

インドネシア島 遺族ら収集訴え

マカッサル港の西約五キロの海上で、兵士らを輸送中の「第十一号掃海艇」(六三〇ノ、全長七二・五メートル)が米軍機B24の爆撃を受け沈没。乗員三百人のうち、生存者は八十人、二百十九人は海に没したとされる。

「船の残骸(さんがい)と遺骨を発見した」。元国際協力機構(JICA)の専門家としてマカッサル駐在経験のある脇田清之さん(六〇)

「神奈川県」の元に二〇〇五年末、知らせが届いた。

二十四歳で乗員だった実兄の池田二郎さん「愛媛県出身」を失った福岡県の元中学校教諭笠原美代さん(八〇)らとともに、脇田さんは昨年四月、現地の会社に調査を依頼。海底の写真には、泥土とともに多数の骨が散乱する様子が写っていた。

脇田さんらは同月、厚生労働省に、第十一号掃海艇の調査報告書や引き揚げられた計器のプレートなどを提出し、正式な調査と遺骨収集を求めた。

厚生省は昨年八月に調査実施を決定。「〇七年度中に担当者を派遣し、インドネシア政府と協議する」(社会・援護局外事室)としているが、実現のめどは立っていない。脇田さんは「いたずらに時間だけが経過し、目に見える進展がない」と憂慮している。



インドネシア・マカッサル湾の海底に散乱する遺骨(元国際協力機構専門家 脇田清之氏提供)

インドネシア・スラウエシ島(旧セレベス島)南部のマカッサル湾に、日本人戦没者の遺骨が散乱している。第二次大戦中に撃沈された艦艇の乗員たちの遺骨で、鉄材などを売るために船体を切断した地元の住民らが、そのまま放置しているためだという。艦艇の原形は崩れ、遺骨の散乱に拍車がかかっており、遺族は「早く日本に連れて帰りた」と訴える。

同湾では戦争末期の一九四五年三月二十八日、